

# 目次

序論	3
第一章 三国同盟の締結と日本海軍	12
一 日本の近代化とドイツ	12
二 第二次世界大戦前の日独関係	14
三 日独防共協定と陸海軍情報協定の締結	18
四 ジョージ六世戴冠式と日英独関係	20
五 訪独親善使節団の訪問中止	23
六 日独伊三国同盟の締結	24
七 開戦前のドイツ海軍の協力要請	30
八 「南へ進め」―ドイツのシンガポール攻略要請とオトメドン号事件	33

九 松岡外相の訪独とシンガポール攻略問題…………… 39

第二章 独ソ開戦と日独ソ関係…………… 48

一 日ソ中立条約の締結と松岡外相…………… 48

二 独ソ開戦と松岡外相…………… 51

三 南進決定とコミンテルンの影…………… 54

四 シンガポール攻略と日本の勝機…………… 56

五 ドイツの要請「北へ進め」と関東軍特種演習…………… 58

六 ドイツの要請「北へ進め」と海軍の対応…………… 60

七 独ソ開戦と日本の対ソ姿勢…………… 62

第三章 独ソ開戦と日米関係…………… 68

一 野村大使の派米と松岡外相…………… 68

二	「日米諒解案」の謎……………	70
三	「日米諒解案」と松岡外相……………	73
四	日米交渉と独ソ戦の勃発……………	76
五	「仕掛けられた戦争」に自爆した日本……………	79
六	開戦外交―「身元不明者グループ」の外交再考……………	84
第四章 日本海軍のインド洋作戦……………		
一	日独海軍の共同作戦機構の構築……………	91
(一)	単独不講和協定の締結……………	91
(二)	軍事専門委員会の設置……………	94
(三)	日独軍事協定の締結……………	96
二	日本海軍のインド洋作戦……………	98
(一)	日独連合作戦の協議と初期作戦……………	98
(二)	ドイツ海軍からのインド洋派遣要請……………	103

三	日独の戦争指導の不一致……………	109
(一)	「北へ進め」のドイツ陸軍と日本の対応……………	109
(二)	イタリア機の飛来と空路連絡便設定問題……………	112
(三)	戦争指導の混迷と連絡使節の派遣……………	115
(四)	チャンドラ・ボースの来日……………	117
(五)	日独戦争指導の亀裂……………	118
(六)	海軍の汚点、潜水艦の戦争法規違反事件……………	121
<b>第五章 ドイツ海軍のインド洋作戦…………… 133</b>		
一	水上艦艇による海上交通破壊戦……………	133
(一)	戦闘艦艇による海上交通破壊戦……………	133
(二)	仮装巡洋艦による海上交通破壊戦……………	136
二	極東における独伊海軍の潜水艦戦……………	141
(一)	ドイツ潜水艦の極東への展開……………	141

	(二)	独伊潜水艦のインド洋作戦	143
	三	インド洋潜水艦戦の衰退と終焉	146
	四	日独インド洋作戦の評価	148
<b>第六章 日独海軍の海上連絡便</b>			
	一	封鎖突破船による物資の輸送	154
	二	封鎖突破船による人員の輸送	157
	三	日本海軍の潜水艦による連絡	158
	四	ドイツの潜水艦による連絡	162
	(一)	物資の輸送	162
	(二)	人員の輸送	163
	五	イタリア海軍の輸送潜水艦	166

第七章	日独連合作戦の問題点	171
一	日独連合作戦の政戦略上の問題点	171
(一)	日独政戦略の分裂	171
(二)	陸・海軍戦争指導の分裂	175
(三)	相互過信のミラーエフェクト	177
(四)	相互不信のミラーエフェクト	179
(五)	日独両国内の獅子身中の虫	182
二	日独インド洋共同作戦上の問題点	184
(一)	潜水艦用法の蹉跌	184
(二)	日独連合作戦上の問題点	185
(三)	後方支援上の問題点	186

第八章	ドイツの敗戦と日本海軍	192
一	ドイツの降伏と極東のドイツ海軍	192
二	駐独海軍武官のスウェーデンにおける和平工作	194
三	駐独海軍武官のスイスにおける和平工作	198
四	ドイツ潜水艦の極東回航要請	203
五	ドイツの降伏と日本の対応	205
第九章	日独技術・経済関係	213
一	野村視察団による技術導入	213
二	大戦中の日独技術交流	216
(一)	潜水艦建造技術	217
(二)	航空関係の技術	218
(三)	その他の技術	221

(四) 日本から供与された技術と武器	222
三 日独経済・技術協定の締結	223
四 技術から見た日独関係	228
(一) ドイツの技術と日本海軍	228
(二) 親独・親日家の活動	233
(三) 日独の国家エゴと大目標の欠如	234
<b>第二〇章 日本海軍と日独ソ関係</b>	<b>243</b>
一 日本の開戦と日ソ関係	243
二 大戦中に日ソ間に生じた問題	247
(一) 通峡制限・航行制限問題	247
(二) 船舶の被害をめぐる問題	249
(三) 米国への基地提供問題	251
(四) 米国からの移籍船舶問題	255

三	ソ連の対日参戦と米国の対ソ援助	258
四	日本の対ソ終戦交渉	261
五	陸・海軍の終戦工作と戦後構想	266
六	ソ連侵攻と日本海軍	271
	(一) 日本海軍の対ソ作戦計画	271
	(二) ソ連軍の千島・樺太占領作戦と日本海軍	273
七	ソ連の千島占領と米ソ関係	276
第二章 コミンテルンから見た第二次世界大戦		
一	近衛文磨と革新官僚と陸軍統制派	285
二	反コミンテルンがもたらした日独接近	292
三	コミンテルンと日中一五年戦争	294
四	コミンテルンから見た米国	297
五	コミンテルンに二度敗北した日本	299

六 太平洋戦争の人種的視点―日独の比較…………… 303

第二章 海軍・外務省の戦争責任と東京裁判史観…………… 311

一 日独伊三国同盟の評価…………… 311

二 海軍の戦争責任と高木惣吉少将の弁明…………… 314

三 海軍と外務省の「イカ墨」論争…………… 317

四 外務省の戦争責任と東京裁判史観…………… 322

おわりに…………… 329

一 人は変わる思想も変わる…………… 329

二 本書執筆の動機…………… 335

事項索引	363
人名索引	368
索引	368
参考文献・資料目録	338

※本データの全部または一部を無断で複製・転載・改竄・公衆送信・本データを第三者に譲渡することは有償無償に関わらずご遠慮ください。

個人利用の目的以外で複製や第三者へ譲渡は著作権法などの関連法によって禁止されています。